

「久留米でやってる地域福祉やコミュニティの活動あれこれを知ろう！」 ケアするローカル研究所 in くるめ DAY2 開催レポート

11月6日（木）、久留米市寺町にある真宗大谷派 清涼山 真教寺にて、ケアするローカル研究所 in くるめのDAY2が開催されました。



まずは、DAY1の振り返り

まずは、「ケアするローカル研究所」ってなんだっけ？のおさらいから。久留米市の地域福祉課によるこの事業。地域福祉⇔地域にあるケアってなんだろう？を探究し、地域の住民としてケアにどう関わってみたいかを考え、小さなアクションを進めていく活動となっています。

10月4日（土）に、久留米大学の地域連携センター「つながるめ」にてDAY1が行われ、本事業を受託している「株式会社ここにある」代表取締役の藤本遼さんより話題提供いただき、参加者のみなさん同士でケアや地域福祉とはなにか？を深めました。



尼崎市で取り組んでいる障がいのある人もない人も一緒に楽しめる「ミーツ・ザ・福祉」の活動の軌跡を振り返りつつ、ケアや地域福祉の定義、それを取り巻く社会状況などもお話しいただき、地域にあるケアを考える上での視点を持ち帰ることができた時間でした。

今回は、DAY2ということで、久留米市で地域福祉をテーマに活動されている3名のゲストからのお話を伺い、既存の取り組みをどう広げていけるか、どう関われるかも含めて、今後やってみたいことのアイデア出しを行いました。

お寺で！？ケアするローカル研究所

内容に入る前に、まずは会場のご紹介から。今回の会場はなんとお寺です。久留米市寺町にある「真宗大谷派 清涼山 真教寺」というこの場所。福祉とお寺、何の関係が…？と思われるかもしれませんが、実はただのお寺ではないのです。

住職とそのご子息も本イベントに参加してくれ、お寺とその取り組みについてご紹介いただきました。

「週に3日、お寺でラーメン屋もしています。月に1度は別の方がカフェしたりとか…毎月6日は、12時から精進の料理をみんなで食べ、お勤めをし、お話を聞くという場もあります」

なるほど。実は、昔からお寺という場所はケア的な要素を十分に発揮してきた場所であり、空間なのかもしれません。



場所を貸してくださっただけでなく、会にもしっかりとご参加いただき、一緒にケアを考えました。ありがとうございました。

お寺の中で、椅子を並べて話を聞く…なんだか新鮮な気持ちで、会がスタート。今回は、DAY1には来られなかったけれど参加している、という人が半数ほど！多様な年代、属性の方が集まってくださいました。近くの方と自己紹介や近況報告などを行い、場が和んだところで、早速ゲストからのお話に移ります。今回は、久留米市で地域福祉にどっぷりハマっている3名のゲストから話題提供をいただきました。

ナンパーソンを増やしたい！

まずは、久留米市社会福祉協議会の岡由美さんから。

岡さんは、久留米とは縁もゆかりもなく、福井県の雪国育ち。幼少期からヤングケアラーであったこと、現在ひとり親で子どもを育てていることもあり、福祉を受ける立場でもあったといいます。

平成26年に、久留米市社会福祉協議会に入職。ボランティアセンターに配属されて3年目。ボランティアセンターは、「社協の出島であれ！」と言われるそうです。さまざまな人と知

り合って、福祉とは違うつながりをつくり、新しい風を吹かせるのが仕事。「飲み会こそ、人と人をつなぐ場所であり、仕方なくいろいろな人と関わって、飲み歩いている！」と冗談混じりに話してくださいました。



岡由美さん（久留米市社会福祉協議会 地域福祉課 ボランティアセンター）。プレゼンから岡さんの巻き込み力が伝わってきました。この人に言われるとなんだか手伝っちゃいそう、

岡さんはDAY1への参加を経て、「『ケア』を中心に考えると、わかりやすく身近な言葉が出てくると感じた」といいます。なかでも気になったのは「ナンパ上手」という言葉。「藤本さんが久留米市外からも多様な人をこの場に連れてきているのがすごいですね」と話していたところ、職場の人たちから「岡さんもナンパ上手いよ！」という突っ込みが。そこで、岡さんに巻き込まれ地域福祉にのめりこんだ人たちを、勝手に「ナンパーソン」と名付けてみたそうです。

ナンパーソンNo.1である、35歳のとある男性の方は、自身の経験を活かしたい、久留米が大好きで良いまちになってほしい！と願っていました。車いすユーザーでもある彼を、学校で福祉教育を広めるゲストティーチャーに任命！車椅子でも、育児におしゃれも楽しめる！そんなことを体現している方だそうです。

ナンパーソンNo.2は、子どもが安心して場所をつくりたいと居酒屋を運営しながら、子ども食堂などの活動をしている方。福祉と異業種のつなぎ役になってもらえないかと、ボランティアフェスティバルの実行委員を依頼しました。その方がもつ人とのつながりで、出店者の充実に貢献されたそうです。「ナンパをするだけじゃなく、ナンパをした人が活躍できる場を設けているんです」と岡さん。

ボランティアフェスティバルとは、毎年テーマを設定して、ボランティア団体の展示、ステージ披露、テーマに沿ったクロストークなどを行っているイベントです。高校を中退した方が大学に行きたいけれどお金がない。障がいをもっているけれど、自分もボランティアがしたい。視覚障がいの活動を広めたい。ただただ楽しいことをやりたい。そのようないろんな想いや願いが交差する、ごちゃ混ぜ空間のイベントだそう。

「福祉に関わる人も、そうでない人も、誰かをサポートすることが多い人も、サポートされることが多い人も、なにかをやりたいと思っている人も、いろんな人が混ざって考えていく場づくりをしていきたいなと思っています。今日参加されているみなさん、よかったら今日岡にナンパされませんか？」

パワフルで熱いプレゼンに、参加者のみなさんの目もキラキラ。「私も巻き込まれたい」「ナンバーソンになりたいなあ」という心の声が聴こえたような時間でした。

持続可能な事業が豊かな地域をつくる

続いては、AU-formal実行委員会に所属している高橋米彦さんからお話をいただきます。久留米市に生まれ、グローバル企業から中小企業まで、ビジネスの世界で経験を積んだ後、2年前に独立して事業を行っている、ビジネスパーソンです。



高橋米彦さん（Bottled Local 代表／AU-formal実行委員会）。ずっとビジネス畑にいた自分が福祉とつながって面白い、と語っておられました。

いろいろと経験して気づいたのは「地域があるから、事業ができる。事業があるから、地域が成立している」ということ。

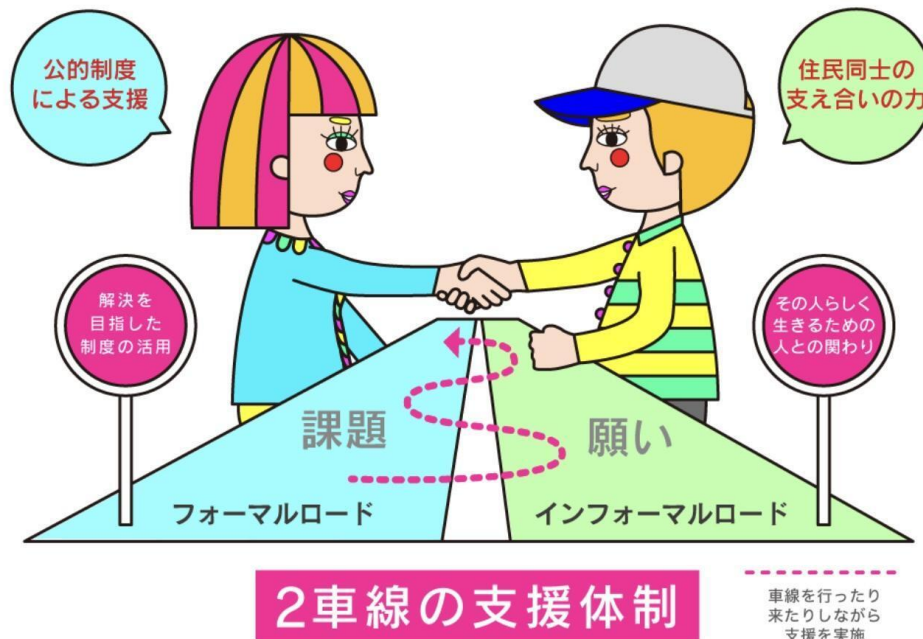
社会状況の変化によって事業が縮小し地域が衰退していく状況を踏まえ、「豊かな地域をつくるのが持続可能な事業の基礎になる。消費していただくだけではなく『循環』する経済が必要だ」と気づいたそうです。独立した現在は、コンポストや竹林整備などを通して循環をどうつくるか、を考えています。

そんな高橋さんはどのようにして福祉に出会ったのでしょうか？

「豊かな地域とはどういうことか？を考えると、一人ひとりが自分らしくいられて、一緒にみんなで生きていける社会が大事だと思っていて。その結果、地域福祉に行き着きました」といいます。

高橋さんが所属するAU-formal実行委員会は、16人の異業種メンバーで構成され、15の市民活動団体が関わり「叶え合う支援」を行っています。困っている誰かの課題を解決することは、専門の人しか関われない特別なものというわけではありません。多様な人々が関わり合い、その人の「願い」を叶えるという視点で暮らしのあり方を模索することで、支援の幅を広げることができるのではないかと考えています。大事にしていることは「課題より可能性」「知識より意識」「解決より関係性」。公的な制度を活用した課題解決も、願いを叶えるための住民同士の支え合いも、どちらも大事。二車線道路のように進めていくことで、暮らしやすい社会になっていくと考えているそうです。

「できない」を解消する + 「したい」を叶える



出所：AU-formal project

<https://kanaeau.com/>

実際に、長年引きこもりだったMくんは、ある時自分で思い立って、外に出るようになり、はじめは地域のコミュニティカフェでコーヒーの袋詰め作業に参加するようになりました。その後、そこで出会った人とマラソンに出たいという話に発展し、毎週みんなで練習するように。結果、福岡マラソンを完走！それが自信に繋がり、現在は福祉施設での就職を目指して活動中だそうです。「イベントの手伝いも楽しみながらやるようになりました」と高橋さんは嬉しそうに話します。

2月9日はふくの日ということで、地域福祉の日と決め、全国の重層的支援体制整備事業に取り組む仲間とともに、シャボン玉を吹くイベントを開催予定だそうです（今年は2月8日に開催予定！みなさんもぜひご参加ください）！

「自分たちの3%の力を合わせると、できることが広がるはず。みんなで楽しい社会をつくれたら」と語る姿に、柔らかいケアの眼差しを感じました。

子どもたちが安心して生きていける社会へ

最後に、民生委員と子どもの権利を守る活動を行っている佐藤美紀子さんより、お話しいただきます。

久留米市で生まれ育ち、大学も実家から通学。塾で子どもたちに勉強を教える仕事を経て、結婚後は、旦那さんの自営業を手伝いながら、子育てに向き合う日々。30代以降は子ども会の活動に関わりはじめ、祭りへの参加、寄付集めなどを通して地域の親子と接するようになり、やがてコミュニティセンターに通うようになったそうです。



佐藤美紀子さん（久留米市民生委員児童委員協議会副会長／NPO法人にじいろ CAP 監事）。素敵な久留米緋の着物をお召しになっていました！着付け体験も行っているそう。

佐藤さんは、地域の人権講座で、子どもへの暴力防止法（CAP）に出会います。NPO法人にじいろ CAPは、子どもたちが、安心して自信を持って自由に生きていくことができることを伝えるプログラムを行っている団体です。「自由が奪われた時は、NOと言っている。『～しなさい』ではなく『～していいんだよ』という考え方に惚れた！」といいます。

50代になって、当時の地区の民生委員の会長に声をかけられ、民生委員に。民生委員は、地域の相談役として、子どもからお年寄りまで、地域の人々の困りごとをプロの人につなぐ役目です。

佐藤さんのポリシーとして、日吉校区は久留米市の中心部にあり、校区の住民だけでなくさまざまな人が集まってくる交差点であるからこそ、いろいろな人に声をかける、ということに取り組んでいるそう。最近では、朝家の前で若い人が寝転んでいたといいます。心配で声をかけると、「大丈夫」と答えるものの動くことはなく、たびたび様子を見て待っていると、気がつけば居なくなっていたそうです。ただ、紙に「すみません、ありがとうございます」と書き置きしているのを見て「ホッとした」といいます。

また、スマホで道を探している人も多く見かけるが、声をかけるようにしているとのこと。昔は人に聞くのが当たり前でしたが、最近はスマホで解決できてしまいます。それでも、佐藤さんは「人に聞くことをしてもらいたい」と話します。

佐藤さんの思いやりある声掛けは、いろいろなものが成熟した現代社会にとって、失われつつあるケアのやり取りかもしれませんね。

やっぱりケアってなんだろう？

お話を聞いたあとは、聞き手の「株式会社ここにある」の代表である藤本遼さんと、「つくるのわデザイン株式会社」の代表である岩本諭さんから、3名のゲストへ気になることを質問していきます。



Q「岡さんは、ナンパ活動をいつからはじめたのですか？」

岡さん)「ナンパ歴は3年ほど。ボランティアセンターに来てからはじまりました。それまでは、判断能力が落ちた方の金銭管理や契約行為などをお手伝いする、個人支援を9年ほどしていました」。しかし話を聞くと、当時から飲み会などを通じて、人とつながることは意識していたとのこと、すでにナンパ活動ははじまっていたのかもしれないと感じました。

Q「社協のようなフォーマルな支援とインフォーマルなケアの連携の仕方は？」

高橋さん) 「社協にきた相談で、一緒にできること、頼みたいことのやり取りはできつつあると感じています」岡さんも頷く様子。「普通の家庭のことをみんなで考えるのはとても新鮮であるが、インフォーマルな人がそこにいる意味も感じている」と語ります。

Q「高橋さんは、なぜAU-formal実行委員会に関わることになったのですか？」

高橋さん) ビジネスをするうえで地域の重要性に気づいた後、自分が気になっている「地域」と、未だよくわからない「福祉」が合わさった「地域福祉」ってなんだろう？と思っていたところに、仲間からAU-formal実行委員会に誘われたのがきっかけだそう。「実際、Mくんとは、マラソン練習を一緒にやったり。今も昔も福祉の知識はないが、こんな形で役に立てるんだ」という気づきがあったといいます。

Q「佐藤さんが民生委員で普段している活動を具体的に教えてください！」

佐藤さん) 今一番心配なのが、高齢者の見守り。一戸建のゴミ屋敷に暮らす、独居暮らしの女性は頑なに動かなかったそうです。「説得はしたくないけど、その人の幸せになる道を探してあげたいという想いで5年くらい関わっていました」とのこと。無理強いせずが一番良い方法を探し出すのが民生委員の仕事。自治会に入っていない高齢者にも声をかけて、月2回の介護予防教室に誘い、孤立を防いだり、放課後に勉強したい子どもたちを集めて、丸つけサポートをしたりと、活動は多岐にわたっているようです。

「民生委員って大変だと言われるけど、外で声をかけられることがうれしい」と、楽しんでいる様子がとても印象的でした。



Q「それぞれにとって、ケアってなんですか？」

高橋さんは、「支え合う」は課題っぽい感じがあるので「叶え合う」という切り口で、とっつきやすくしているそうです。藤本さんから、「合う」という双方性、相互性が大事なのでは？との返しが。英語でいえば「care with」という表現が該当するだろうと。ともにケアする（共助）がケアの本来の姿ではないかという提言がありました。

続けて佐藤さんも「一方通行ではなく、お互い話し合って考えていく。お互いのことを知って、知ってもらって、気持ちの良い空間をつくるのがケアかなと思います」と語ります。

岡さんは「今日、洗濯物が落ちているのを拾ってあげようと思って、石垣にかけてきた。ケアってその後ろに誰かがいて、誰なのか見えない場合もある。ケアの後ろ側を考えることが大事なのではないか」とおっしゃっていました。

あらゆるものが便利になったことで暮らしが個人単位で完結してしまい、人と人との交わりが少なくなってきた今、お互いを知ろうと想像力をもって歩み寄ることがケアの第一歩になるのでは、と感じました。

3人の話を深掘りタイム

ここからは、参加者が特に気になったセンパイの話をくわしく聴く時間へ。岡さん、高橋さん、佐藤さん、そして聞き手の岩本さんを囲んで、それぞれ気になることを尋ねたり、一緒に深めたりしました。



参加者それぞれの立場から気になることを深掘り。ズバリ！核心をついた問いも出ていました。

岡さんのグループでは、ボランティアの定義や社会福祉協議会の役割について話題にあがったほか、これまでの学びを踏まえて「ケア」という言葉を積極的に用いて、自分ごとにできる人が増えていくと良い、といった話にも。

盛り上がりすぎて、休憩時間も話し続けるグループもありました。参加者のみなさんの学ぶ姿勢、知りたい、考えたいという気持ちがとても伝わる時間でした。

じゃあどんなことができそう？

さて、御三方から吸収したところで、ここからは、藤本遼さん・岩本諭さんのファシリテーションのもと、これからどんなことをやっていきたいか？のアイデア出しを行っていきます。ケアするローカル研究所は、学んで終わりのプログラムではなく、ちょっとしたアクションもセットで検討していきます。

まずは、前回のアンケートで出たアイデアと今進んでいる既存の取り組みをピックアップして確認した後、アイデアの種を置いてみよう、との声掛けがありました。



前回に引き続き、メンバーの考えや想いに耳を傾ける温かい場の雰囲気が構築されています。

プロジェクトとして未だイメージが湧いていないものも含めて「ケアを考えるうえで、まずは聴くことが大事では?」「所属や役割などの肩書きを外した状態で、人と人とが関わることが大事な気がする」「『おじさんトレカ』（福岡県香春町でボランティア活動に取り組む高年男性の特技や個性を反映したキャラクターカード）と『ナンバーソン』を掛け合わせてなにかできるのでは?」「ケアという言葉を広めたい」「食べることでケアできる（他の誰かを幸せにできる）取り組みを考えてみたい」など、アイデアの種になるような気づきやモヤモヤもアウトプットする時間となりました。

仮案をもとに、どのグループに参画したいか?を選び、どのような方向性で何を進めていくか?を話し合いました。DAY2終了時点で、出た企画・活動がこちら。

- ・地域にひそむケアを見つける活動

まちの中に潜んでいる、誰かが行ってくれている思いやりや手入れ、気配りなど、さまざまなケアを掘り起こし、ケアの眼差しを育む。

- ・ボランティアフェスアップデートPJ

3月8日に開催されるボランティアフェスティバルのブラッシュアップを行う。

- ・AU-formal フクフェスPJ

叶え合う支援を行うAU-formal実行委員会の皆さんとともに、フクの日（今年は2月8日）に開催されるイベントのブラッシュアップを行う。

- ・ナンパーソンカードPJ

「おじさんトレカ」をインスピレーションとして、ナンパーソン（相談に来た人に対し共に「叶え合う人」）カードを作成する。

- ・食×ケアの探究PJ

記憶に残りやすく、関わりしろが広い「食」を通したケア活動の調査研究や活動を考える。



参加したいPJの提案者/中心メンバーのもとへ集まり、アイデアの種を育てる対話を行いました。

まだ具体的な活動内容は決まっていないところもありますが、これからの活動に対してワクワク感が満ち溢れた時間となりました。また、DAY2にして、その後のLINEグループの動きも活発で、これからどんな活動に昇華されるのか、期待が膨らみますね。引き続き、ケアとはなにか？を探究しつつ、楽しみながら地域の中でアクションを進めていきたいと思います。